

〈実践報告〉

遠隔地小規模校での学習支援連携の定着への課題

— 藤女子大学と厚田中学校による2年間の取り組みを振り返って —

伊 井 義 人 (藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 准教授)

中 村 伸 次 (石狩市立厚田中学校 教頭)

岩 崎 遥 (藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 学生)

西 川 絵 梨 (藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 学生)

足 立 瞳 (藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 学生)

深 澤 麻 依 (藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 学生)

外 川 茜 (藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 学生)

本論では、今年度で二年目を終えた藤女子大学の学生による石狩市立厚田中学校での学習支援（スクール・アシスタント・ティチャー：SAT）事業の現状と課題、そして将来的な展望を報告する。厚田中学校は、藤女子大学花川校舎から車で50分ほどの海岸部に位置する全校生徒22名の小規模校である。そこで主に教職課程を履修している大学生が、中学校教員や保護者と協力しつつ、数学や家庭科などの授業、学校行事の面で、生徒と触れ合い、多様な学習支援を行なっている。本論は、大学・中学校側のSAT担当教員だけでなく、実際に学習支援に参加した学生の視点から、今年度を振り返り、来年への展望を述べている。現状分析としては、①学校行事（学校祭・餅つき大会・卒業式）への参加、②地域との関わり（ピザ教室）、③学生主体の連絡調整が促進されたことが、今年度の成果といえる。その一方で、依然として、遠隔地域での学習支援という特色上、①厚田への交通手段、それに伴う②学生の時間の確保が課題として残った。しかし、来年度（2013年）は、厚田中学校での学習支援を経験し三年目の学生も4年生として在籍するため、SAT事業の継続性・発展性を視野に入れた、彼女たちの集大成に期待したい。

なお、今年度のSAT事業は、石狩市教育委員会の予算と共に、藤女子大学QOL研究所からの補助金を通して、運営された。

キーワード：学習支援、小規模校、学生主導の取り組み、教職課程

はじめに

石狩市教育委員会が主催するスクール・アシスタント・ティチャー（School Assistant Teacher：SAT）の一環として、藤女子大学の学生が厚田中学校に学習支援（以下、厚田SAT）を提供することになり、2012年度で二年目を終えた。一年目は、厚田SATを進めるために、無我夢中に参加者全員が走り続けてきた。しかしながら、二年目は、その継続性への配慮だけでなく、新規性の推進を担当教員だけでなく、学生も

意識してきた。

本報告書は、昨年続き、厚田SATに関わった教員・学生が共同で執筆し、完成したものである。特に、実際に学習支援に関わった藤女子大学人間生活学科の5名の学生には、それぞれ「二年目」を意識した感想や自己評価を書いてもらった。

そこで本報告の目的は、第一に2012年度の厚田SATを振り返り、その課題を検証することにある。第二に昨年度との実践を比較した上で、今年度、改善された点を抽出する。そして、最後に、来年度に向けた

取り組みを明確にしたいと考えている。

なお、2012 年度は藤女子大学 QOL 研究所から研究助成(実践的活動)を受け、厚田中学校における SAT 活動を推進することができた。本稿は、その活動報告書としての位置づけとなる。各箇所の分担執筆者は各文末に記してある。最終的な調整は、執筆代表者である伊井が行った。(伊井義人：はじめに)

1. 厚田中学校の状況

厚田中学校の概要は、昨年度の報告書で既に述べている。ただし、在籍数が異なり、2012 年度は 3 年生 6 名、2 年生 11 名、1 年生 5 名で計 22 名であった。昨年度は、全校生徒が 27 名だったので、5 名減少したこととなる。この減少により、女子バレー部は浜益中学校、野球部は聚富(しっふ)中学校、浜益中学校との合同チームを結成することとなった。しかし、この状況の中でも、両チームとも好成績を残している。

教職員数は、校長 1・教頭 1・教諭 7・養護教諭 1・栄養教諭 1・事務職員 1・校務補 1 と昨年度と変動が

なく、数名の教員は複数の教科を担当しなければならない状況が続いている。人数自体は、変化がないが教頭・美術(体育・技術)科教諭が転勤により入れ替わった。

2012 年度の学校課題は「表情豊かにいきいきと活動する厚田中学校～地域の中で存在感のある学校を目指して～」であり、これも昨年度と変更はない。また、経営の基本方針・重点の項目に「地域人材の活用」の推進とあり、この流れから、藤女子大学の学生が学習支援ボランティアに定期的に訪れることとなった。

(中村伸次：1)

2. 厚田中学校での SAT

(1) 今年度の取組の概要：日程

2012 年度の実施スケジュールは、表のとおり 4 月から始動した。2011 年度から参加している 3 年生 4 名が主体となり、教職課程科目(教師論・教育原理)で厚田 SAT の広報活動をしてくれた。この 4 名は、今年度開始当初より、次年度以降の継続性を常に念頭に入れ

表 2012 年度 厚田 SAT の動き

年	月	取り組み
2012 年	4 月	24 日：石狩市教育委員会 SAT 説明会(花川校舎) 厚田 SAT 打ち合わせ(花川校舎)：岩崎・西川・中村・伊井 教育原理(2 年生)の講義で厚田 SAT の説明：足立・岩崎・西川 25 日：大学院生の外崎さんより、厚田・古潭地域の歴史レクチャー 26 日：教師論(1 年生)の講義にて厚田 SAT の説明：岩崎
	5 月	1～2 日：厚田・浜益現地調査：岩崎・西川・山口・梅本・三宅・伊井 26 日：厚田中学校運動会 ※雨のために参加できず。
	6 月	11 日：厚田 SAT 1 回目(数学支援)：足立・岩崎・西川・菊地 12 日：聚富地域のカフェ・香音を訪問：岩崎・西川・伊井 26 日：香音にピザ教室・計画案提示：岩崎・西川・伊井
	7 月	10 日：厚田 SAT 2 回目(数学支援・望来獅子舞練習披露会) ：足立・岩崎・西川・中山 ※えりすテレビ取材(中学校+大学) 15 日：香音でピザの試作品を作る：足立・岩崎・西川・伊井 24 日：夏休み学習交流打ち合わせ：文化部メニュー確認(中学校) ：岩崎・西川・伊井
	8 月	1 日：えりすテレビ・オンエア 17～18 日：厚田 SAT 3 回目(数学支援・部活動交流) ：足立・岩崎・西川・深澤・外川・山口・橋本・伊井
	9 月	22 日：香音にてピザ教室・最終打ち合わせ：西川・岩崎 25 日：聚富中学校との打ち合わせ：岩崎・西川・伊井 27 日：厚田 SAT 4 回目(数学支援)：岩崎・西川・深澤 聚富中学校訪問(ピザ教室募集広告の配布) 30 日：厚田中学校・学校祭参加：岩崎・西川・高橋
	10 月	10 日：香音へ食材を届ける：伊井・岩崎 20 日：聚富(香音)にて聚富中学校の生徒とピザ教室：岩崎・西川 22 日：厚田 SAT 5 回目(数学支援)：岩崎・外川・西川・滝本・伊井

	11月	6日：家庭科授業打ち合わせ：西川・深澤・伊井 13日： 厚田 SAT 6回目 （数学支援）：足立・岩崎・西川・伊井 20日：家庭科授業検討会1（花川校舎） ：深澤・中村・笹・伊井・西川・岩崎
	12月	10日：家庭科授業検討会2…深澤さん模擬授業（花川校舎ゼミ室） ：見学者9名 11日： 厚田 SAT 7回目 （家庭科授業）：深澤・岩崎・西川・伊井
2013年	1月	22～23日： 厚田 SAT 8回目 （合格祈願餅つき大会、数学支援） ：岩崎・深澤・中山・片原・伊井
	2月	26日： 厚田 SAT 9回目 （数学支援+SAT 評価インタビュー）：岩崎
	3月	13日：卒業式出席：足立・岩崎・西川・深澤・伊井

てくれていた。結果として、数学と家庭科での学習支援を主とした厚田 SAT は全体で9回実施された。これは、去年の6回と比較して3回増加した。

厚田 SAT の学習支援回数も増加したが、その他の様々な活動にも学生たちは挑戦していった。例えば、5月のゴールデンウィーク中には、厚田・浜益地区のフィールドワークに赴いた。その際、両地域の散策だけではなく、厚田小学校や浜益小学校を訪問した。特に、浜益小学校では、ICT 機材を使った授業を見学した。他にも、聚富地域のカフェ「香音(かのおん)」のオーナー小笠原さんにご協力をいただき、聚富中学校の生徒とのピザ教室を開催するなど、厚田中学校以外との地域連携も模索した一年であった。

また、主となる厚田中学校との関わりの中でも、学校行事（学校祭・卒業式など）への積極的な参加を心がけた。この点からも、継続性を第一に考えながらも、学生たちは厚田 SAT における新規性を常に実行に移してきた。

(2) 学生の参加者人数とその増加への配慮

表のとおり、中学校や地域との関わりが形態が多様となり、どの行事をもって SAT 参加者と定義するのは難しい。しかし、数学・家庭科の学習支援（9回）に限定すれば、延べ32名が参加した。その実数は10名であった。中心的な役割を担った学生は、3年生の4名である。延べ数は、昨年度よりも5名増えているが、実数の変動はない。つまり、平均して一人が3回程度、厚田 SAT に参加していることとなる。今後は、この実数を増やすことが課題となろう。今年度は、学生たちの自家用車、レンタカー、学園バス、大学担当教員の車を併用するなど、厚田中学校への交通手段にも多様性をもたせ、可能な限り、学生のスケジュールに合わせた手段を模索した。しかし、参加学生の実数が増加しないなど、その成果が現れたと結論づけることはできない。今後も、学生と学校側のニーズにより合致し

た交通手段を継続的に考えたい。（伊井義人：2(1)(2)）

(3) 中学校での準備状況

今年度、大学との SAT の連絡調整は学生代表者を通して行った。訪問時間の決定、参加者の取りまとめ、支援準備（教材の確認や学習会）など円滑に調整することができた。忙しい講義の合間をぬって意欲的に取り組む姿勢や、学習支援以外にも行事などに積極的に参加する姿勢には、将来教員になろうとしている学生たちの熱意を感じることができた。

(4) 学習支援での活動

①数学での活動

今年度から、新学習指導要領の完全実施に伴い「選択数学」がなくなり、普通授業での支援を藤女子大学の学生には、お願いすることとなった。基本的には昨年同様、島貫教諭自作の既習事項のドリルを約一か月前にファックスまたはファイル形式で学生に送付し、それをもとに学習会を開きながら支援の準備をしていた。マンツーマンに近い形で個別指導を行うことで基礎基本の定着に効果があったと思われる。また、二年目となる学生は昨年の経験を踏まえ生徒への接し方、アドバイスの仕方にも向上が見られた。単元末のドリル学習や定期テスト直前の復習の時間に支援を行ってもらうのが SAT の効果的な活用方法であると考えられるが、授業進度と学生の来校可能時期との関係で必ずしもその時期に行うことができなかった。次年度の計画については、来校時期など年間の計画を立て、より効果的な支援方法を考えていきたい。

②家庭科授業での活動

昨年に引き続き、家庭科の免許取得予定の学生に外部講師として授業を行ってもらった。本校家庭科の授業計画の中で、学生が取り組みやすい単元（食領域：五大栄養素）を相談し、専門の見地に基づいて指導案

を作成してもらい、学生、伊井准教授、笹優子栄養教諭、中村で事前研究の機会をもち指導案検討と模擬授業を行い事前準備にあたった。

当日は、1・2年生で「栄養素のはたらき」についての授業を一人の学生が行い、2名の学生が授業支援補助にあたった。また、石狩市教育委員会の学校教育課職員も見学を訪れていた。教材の準備もしっかりできており、落ち着いた雰囲気ですべてを進めることができていた。その後、短時間ではあるが事後研究を行い、授業づくりの反省や生徒の活動についての交流を行った。この活動は、①免外指導の学校でも専門的な教材研究に基づいた授業を子どもたちが受けられること、②教員免許を取得して将来教員になろうとする学生に授業をする機会をもたせる、等の理由から中学校・大学の双方にとって有効なものである。

(5) 学校行事での活動

①夏休み（部活動交流）の活動

昨年に引き続き夏休みの学習会の日に来厚いただき活動してもらった。全学年の学習支援と併せて、1・2年生の部活動に入り、子どもたちと交流を深めた。野球部はマネージャー的な活動、女子バレー部は子どもとともにプレーしていただいた。文化部はピザ調理をともに行った。調理に関しては学生たちが材料の調達や子どもたちに分かりやすく伝えるためのレシピ作成など、最初から最後まで学生が主体となり子ども達と活動した。

②学校行事への参加

本校では地域に伝承される伝統芸能を継承するため、総合的な学習の時間に「望来獅子舞」を行っている。年度当初に保存会の方に来校いただき、練習を始める。最終的な発表の機会は文化祭である。SAT が来校する機会に獅子舞の学習を設定し、練習段階から見ていただくことにした。また、全校生徒の前で感想も述べていただき、パート練習の様子も見られる機会を設けた。

9月の文化祭当日は獅子舞のほか、生活体験文の発表や、職場体験の発表など、子どもたちの授業以外の場面をみていただいた。また有志発表として、学生3名が器楽演奏で出演し生徒達はもちろんのこと、保護者地域の方々からも好評を得た。また、1月の合格祈願餅つき大会では、前日の準備からお手伝いいただき、生徒・保護者と触れ合い、その距離を縮める良い機会となった。

これらのことは、ともすれば「SAT=学習支援」という構図が本校の場合には当てはまらないことの実例

例である。本校の関係者（生徒はもちろん、保護者・地域・教職員も）が望んでいることは、他の地域から人が来て子どもたちの世界を広げたり、子ども達が他の地域に自分たちの活動を広げていくことであり、SATにもその役割の一端を担っていただいている。

(中村伸次：2(3)(4)(5))

3. 厚田中学校における SAT に関するインタビュー調査

今年度の厚田 SAT の活動に関して、来年度にフィードバックさせることを目的とし、学生の中心的役割を担っている岩崎が、2013年2月26日に厚田中学校へと訪問し、生徒・教職員に対してインタビューを行った。対象は教員9名と生徒7名の計16名である。

(1) 中学生へのインタビュー結果

生徒に対する質問事項は、①数学の学習支援の感想、②学生の行事参加の感想、③昨年度との比較（1年生は除く）、④厚田 SAT の頻度、⑤今後の継続への意見、⑥その他の6点である。協力してくれた生徒は1年生2名、2年生3名、3年生2名である。

①数学支援について

「数学での学習支援を通じて、効果を感じることがあるか」と尋ねたところ、どの生徒も「効果を感じている」と回答した。「学生が個別に持参しているバインダーを活用し、とてもわかりやすく説明してくれる（2年生）」、「教えてもらった問題が出て、解けたときは効果を実感している（1年生）」など、主にテスト対策で SAT の効果が現れていることを生徒たちは感じ取っていた。また、「たまに学生が来てくれることで新鮮味があり、刺激になる（3年生）」といった数学の授業を盛り上げる要因にもなっていることがわかった。

②学生の行事参加について

昨年度に比べ、学生が行事参加を積極的に行ったことに関しては「行事参加を通じて、学生と会話をするきっかけとなり、交流が深まり、率直に楽しかった（1・2年生）」と学生との交流を深める効果が見られたようである。また、「厚田中学校の活動を外部に知ってもらえることはとてもうれしい。来年度からは企画運営から助言をいただきたい（3年生）」という意見もあり、学生の行事参加をさらに発展させることにも期待をしているようだ。

③昨年度と比較して

昨年度から厚田 SAT を経験している 2・3 年生に聞いたところ、学生の行事参加の影響もあり「交流が深まる機会が多くなった（3 年生）」という意見が多かったが、中には「来る人が限定され始め、今年度来てくれた学生は数名しか覚えていない（2 年生）」という意見もあった。生徒たちはより多くの学生が SAT に参加することを望んでいる。

④厚田 SAT の頻度について

どの生徒も「月に 2～3 回は来てほしい」という声が多かった。理由としては、数学支援の充実や普段の学校生活での交流の機会を増やしたいというものであった。

⑤今後の継続について

「ゆとり教育からみのりの教育になることも踏まえると、今後数学の内容がより難しくなるため、授業面のサポートは後輩たちのために是非行ってほしい（3 年生）」といった意見からも、生徒たちは SAT の継続を望んでおり、「今後は生徒会活動でも助言をしていただければありがたい（1 年生）」といったより積極的な活動も期待しているようである。

⑥その他

学生が行った家庭科の授業に関して「とても面白く、わかりやすかった（2 年生）」、「今後は、家庭科や数学だけではなく、他教科にも入ってほしい（3 年生）」といった意見が多く、来年度に関しても期待を寄せているようだ。

以上のインタビュー結果から、生徒たちが SAT の数学支援の活動を通じて、効果を実感し、また、学生の行事参加を通じて学生との交流が盛んになったことに関して好感を持っていることがわかった。また、今後に関する意見が多く述べられていることから、生徒たちは SAT に期待しており、来年度からのより発展させた活動内容を望んでいる。

(2) 教員へのインタビュー結果

教員への質問事項は、生徒へのインタビュー項目に「連絡手段について」を加えた 7 点である。

①数学支援について

多くの教員から SAT による数学支援での効果を感じるとの声がある。その理由としては、学生が学習支援に加わることにより、「指導者の人数が増え、生徒に

対しマンツーマンの個別指導が可能となるということ」「教員よりも学生の方が生徒たちと年が近く、生徒たちのわからない箇所に気がつきやすく、また教員よりも質問がしやすいこと」「外部の指導が入ることにより授業に対して良い刺激となっている」などがあげられた。

②学生の行事参加について

餅つき大会に関しては、特に準備段階から保護者の方々と交流をすることは有意義な取り組みであり、厚田 SAT が保護者へと浸透するきっかけとなったという意見が多かった。また、生徒たちにとっても普段の授業とは異なった行事参加では、大学生の一場面を見ることで、将来を展望する良い機会となっているとの声もあがった。

③昨年度と比較して

数学支援に関しては、今年度から学習指導要領改編に伴った教科書の内容改訂の影響を受け、昨年度のようにスムーズな形で学生にプリントを送ることができなかった現状があげられた。学習支援への準備に対する来年度への改善点である。また、昨年度と大きく異なる行事参加に関しては、学校だけではなく地域の方々にとっても SAT の存在を浸透させることができ、学校よりも地域から認知をしていただけた年となったと考えている教員が多い。

④連絡手段について

昨年度と異なり、SAT の学生と学校が直接、連絡をとりあうことで、具体的な連絡が可能となり、スムーズに計画を立てることができてよかったという声が多かった。一方、今後は学生の中で役割を決め、中村教頭だけではなく、現場の教員と直接、連絡を取り合うことで、より具体的かつ詳細な計画や確認をとることができることを踏まえ、実行に移して欲しいという意見も多く上がった。

⑤厚田 SAT の頻度について

数学の学習支援に SAT が入るタイミングとして望ましいのは「各章の終盤のまとめ演習プリントを実施する際」として、多くの教員が月 2 度を希望している。しかし、本大学と厚田中学校との距離や、学生の授業時数の兼ね合いなどが原因となって、現状としては月 1 度のペースで学習支援が行われていた。来年度は、厚田中学校の希望に近づけるよう、交通手段や時間割の観点から、学生間で調整を続ける必要があることを改めて感じた。

⑥今後の継続について

普段、外部の方々とは接する機会が少ない厚田中学校の生徒たちにとって、「大学生との交流はとても良い刺激となること」「数学の授業に対する生徒たちの興味・関心が高まり、効果が現れていること」から、今後の継続を強く望んでいる教員が多かった。

さらには、数学だけではなく、体育でのソフトボールやバレーボールなどの団体競技での参加や、学生による家庭科の授業実施やティーム・ティーチングの回数を増やすことなどを視野に入れた、来年度からの SAT の発展した活動を期待する声も多くあった。

⑦その他

SAT のシステムに関する意見が多く寄せられた。現状では、毎回の数学支援をする際に、中村教頭と学生が話し合っただけでその都度日程を決めている。従来の SAT 活動とは本大学と厚田中学校との距離が異なることから、多い頻度で入ることができない。そこで、来年度からは、「大枠の年間計画を立てて、どのような教科にどのような場面で学生の支援が入るのかを工夫する必要があるということ」さらには「現在では数学の支援がメインで行われているが、今後はより発展した学習支援として、家庭科の TT の回数を増やし、他教科での授業参加なども視野に入れた活動を計画すること」も期待する教員が多かった。

以上のことから、厚田中学校の生徒・教員は SAT に関して好感を抱いており、今後の継続、そしてさらなる発展を望んでいる。より充実した厚田 SAT を実現させるために、様々な可能性を視野に入れて、まずは年間計画をしっかりと立てて、中学校教員と協議し、役割分担等を決めた上で、さらなる詳細な連絡手段をとっていききたい。(岩崎遙：3)

4. 学生による SAT に関する項目別自己評価

ここでは、厚田 SAT に中心的に関わった学生が、領域ごとに今年度の自己評価及び今後の展開を述べる。

(1) 連絡手段

昨年度と比較して、連絡手段を変更した。昨年度は本学の伊井准教授と厚田中学校山村前教頭が主体となり、厚田 SAT の実施日や内容を検討し予定が組まれ、学生や教員に伝達される形であった。一方、今年度からは学生（主に岩崎）が主体となって、中村教頭と電話やメールを中心に連絡を取り合い、実施日や内容について検討を行い、実行へと移された。

成果としては、二点挙げられる。実際に数学支援や家庭科の授業に携わる学生が連絡を取り合うことで、直接的かつ具体的な内容を検討することが可能となった点である。次に、学生が直接連絡を行い、交通手段などの計画を自ら立てることで、昨年度以上に責任感を持つことができるようになった点である。学生主体で行うことによって、昨年度よりも学生と学校との意見交換が頻繁になり、夏休みでの文化部交流でのピザの調理などといった、学生主体の活動を実現することができた。今後の活動をより充実させるためには、教頭先生との厚田 SAT 全体の連絡に加え、必要に応じて各先生と連絡をとれる体制作りを図っていききたい。学生で役割を分担し、数学担当の教諭をはじめ、家庭科の担当教諭との連絡なども行い、より具体的な活動内容を計画していくことも視野に入れて、今後の厚田 SAT に関する連絡手段を検討したい。そうすることにより、教員と詳細かつ具体的な計画を立て、充実したプロジェクトを展開すると同時に、より多くの学生が責任感をもって厚田 SAT を遂行できる。今後の厚田 SAT の活動が円滑に、より充実したものになるよう、来年度からの連絡手段を再度検討したい。

(岩崎遙：4(1))

(2) 数学支援

昨年度から数学の学力向上を目的に、藤女子大学の学生が SAT として月に 1 回程度厚田中学校で数学の授業のアシスタントを行っている。また、昨年は長期休暇を利用して、数学支援や部活動の交流も行っていたが、今年は学校祭の準備期間や餅つきなどのイベントにも参加し、その際にも併せて数学支援を行った。

数学の学習支援内容は、生徒が各自数学の計算問題や文章問題をプリントで解いていく授業に学生が補助として入り、「わからないところ」「つまづいているところ」を教えるものである。学生は事前に数学の担当教員から授業で使うプリントをいただき、問題を解き準備をして学習支援に参加する。

支援で大切にしていることは、私たちの考えや答えを押しつけないことで、あくまで学生は補助の存在であることを念頭に活動を行なっている点である。生徒が自ら学び答えを導き出すことを目標としているため、学生はわからない問題に対して適切なヒントを出すことが重要である。

基本的には 1・2 年生の数学支援をしており、教室を学生が見回る方法や、マンツーマンの支援形をとっている。1 年生 5 名、2 年生 12 名の少人数学級の支援なのでアシスタント・ティーチャーの手が行き届きやすく、つまづいている生徒を見つけやすい。支援

の回数を重ねるうちに生徒はアシスタントの学生の顔を覚え、わからなくて困っているところを生徒から自主的に質問してくるようになった。昨年度は「途中式」を記入せず、頭の中で計算をする生徒が多かったが、何度も助言をするうちに「途中式」を記入する癖がついた生徒が増え、問題を見直して間違いを自分自身で気づけるようになったのは実践の効果だと感じる。適切なヒントを出すという点では試行錯誤の連続で、私たちが、わからない生徒の目線に立って考えることが大切である。

課題としてはマンツーマンの支援方法がある。この方法は、場合によっては、生徒に威圧感を与えているように感じる。マンツーマンの支援は1年生の様な少ない人数の生徒に対してこの形をとっているのだが、問題を解いている生徒をずっと見張って間違えているところを探すだけの活動になりつつある気がする。これから子どもの数は減少するので、生徒の実態に合わせてSATの学生の人数を減らしたり、生徒が問題を解いている間だけは学生が歩き回ったりするなど、支援方法を見直す必要がある。今後も数学の学力向上につながるために課題などを踏まえた上で支援を継続して行っていきたい。(足立瞳：4(2))

(3) 家庭科授業支援

厚田SATの取り組みとして昨年度に引き続き、学生による家庭科支援を行った。厚田中学校には家庭科専任教諭が配置されていない現状があり、授業は音楽科の上村教諭が兼任している。この家庭科支援は、①家庭科教諭を志している学生が中学校に指導案・教材を提供すること、②教職課程において実践的な授業が少ない学生を対象に授業経験の場を提供することを目的とし、2012年12月11日、人間生活学科の学生(深澤)により実施された。対象学年は1年生1時間、2年生1時間の計2時間で、授業を担当した学生は3年に在籍する学生1名(T・Tとして他の学生2名も参加)である。

授業内容は、両学年とも食分野の中の「栄養素の種類と働きを知ろう(五大栄養素)」である。およそ1カ月半の準備の中で、中村教頭、笹栄養教諭、上村教諭、伊井准教授の指導を受けながら、指導案・教材の作成を行った。

当日、DVDに授業の様子を記録し、厚田中学校教諭数名、大学担当教員、学生2名が見守る中、計2時間の授業が行われた。授業後、指導教員と学生により反省会が行われ、学生の授業に対する課題と成果について意見交換し、本取り組みは終了した。

教職課程を履修する学生は、授業の練習として「模



写真1 家庭科の授業風景

擬授業」を行う。その際、いつも大学生を相手に授業を行うが、今回の場合は中学生に対して行う授業である。学生は学校での授業経験がないため、中学生がどの程度の知識や理解力があるのかわからず、伝え方にどのような工夫をすればより効果的なのかを考えるのが難しかった。しかし、厚田中学校の教員の方々に指導案の相談をさせていただいた際に、生徒の様子や特徴など、いつもそばで生徒を見守っている教員の方々だからこそそのアドバイスを頂き、大変参考になった。

この取り組みはあくまで家庭科の授業の支援であり、「学生が授業を練習する場」ではない。大切な授業を任された責任ある立場なのである。教えなければならないことや求められていることを、事前の中学校との打ち合わせの中から見出し、それを守ったうえで、自分がやりたいと思う授業へと組み立てていくのが何よりも難しかった。しかしそこに一番のやりがいがあり、苦勞から始まった指導案作りは最後には楽しいものへと変わっていた。

また、「家庭科教諭を志す学生」が授業を担当することにも大きな意味があった。それは、家庭科の専門性という視点からだけではなく、学生らしいアイデアを盛り込んだ授業は中学生の興味を引き付けられたと感じたからである。知識や経験は現職教員に及ばなくとも、1時間の授業のために試行錯誤できるのは学生ならではの強みである。

来年度、さらにこの取り組みを発展させていくためのアドバイスとして、授業を行うまでの間に積極的に生徒と交流することを意識するとよいと感じた。どんな生徒たちなのかを知っておくと、指導案を組み立てる上で授業のイメージがしやすい。実際に授業を受ける生徒のことを思いながら、何をどうやって伝えるかを考えることが重要である。そして、熱意をもった学生にこの取り組みを引き継いでいきたい。知識やテクニックではなく、やってみたいという「熱い気持ち」

にこそ、学生が授業を受け持つ意味がある。来年度以降も、そのような気持ちのある学生にこの取り組みを引き継いでもらいたい。(深澤麻依：4(3))

(4) 学校行事

2012年度の厚田 SAT に携わる学生が参加した行事は「獅子舞練習披露会」、「厚田中学校祭」、「生徒会演説」の四つであったが、今年度はこれらの行事に加え、合格祈願を込めて行われる「餅つき大会」にも参加できた。昨年度は見学という形で参加をすることが多かったのに対し、今年度はより多くの行事へ積極的に、地域の方々に関わる形で“参加”をできるように心がけ、取り組んできた。

その中でも9月30日に行われた「厚田中学校祭：華美(はなび)」では、学生3名が有志発表の前座で出演し、楽器演奏を披露する機会をいただいた。厚田中学校で行われる学校祭では、生徒や教員だけではなく、保護者・地域の方々積極的に携わる、厚田全体での大きなイベントであり、今年度も地域の方々が多く見受けられた。こういった、地域の方々に関わる行事で、生徒たちや保護者の有志発表の前座を任されたことは、厚田 SAT を知っていただく機会になり、また、保護者の方々や地域の方々との交流を持てたということでも大きな意味がある。普段の SAT 活動で接することができない学校運営に携わっている保護者、地域の方々との交流を図れたことは、厚田 SAT として大きな進歩であった。

また「餅つき大会」にも、今年度は参加することができた。2013年1月22日の夕方には、中学校の家庭科室で事前準備を、保護者の方々を持ち寄った20升ものもち米や野菜を協同調理し、餅つきとお雑煮の下準備を行った。学校祭の有志発表がきっかけとなり、保護者の方々や打ち解け、交流がとても盛んになり、翌日の餅つき大会も一緒に完成した料理を食し、生徒たちの話をたくさんすることができた。



写真2 餅つき行事仕込み風景



写真3 卒業式

さらに学年末となる3月には学生4名で卒業式に参列した。今回の卒業生は、昨年度から二年間、学習支援などを通して接しており、非常に愛着を持つ生徒たちであった。また三年間の中学校教育の集大成としての卒業式への参列は、教員を目指す私たちにとって非常に心に響いた行事であった。

これらの結果から、昨年と比較しても行事に対して“見学”には終わらずに、地域の輪に加わって“参加”をすることができたと感じている。ただし、大学の授業や交通の便、気候などの影響もあり、「運動会」や「厚田神社祭」などの行事には学生が参加をすることができなかった。来年度は年度計画からしっかりと立てて、より充実した行事参加を行い、地域の方々との交流を図っていきたいと考えている。(岩崎遥：4(4))

(5) 夏休みの交流

2012年度の夏休み交流では昨年同様、学生は野球部・バレー部・文化部と交流した。厚田中学校と聚富・浜益中学校が合同で行う野球部の練習には、岩崎・外川が参加し、声掛けやボール拾いなどを行った。女子バレー部では、バレー経験者である足立が、練習に積極的に参加した。バレー部は昨年に比べ、部員の数が増え、より試合を意識した練習が行われた。

部活動交流の中でも、藤女子大学の学生が全面に出て関わる文化部との交流では、昨年の活動(蒸しパン&フルーツパンチの調理)での経験を生かし、より手の込んだ調理を計画を立てた。昨年同様、学生が活動内容を計画し調理実習の形態での活動となった。厚田中学校の校庭で作られる野菜を使用し、生徒全員分である40枚のピザを作成した。もちろん、粉をこねるところから始まり、先生方の協力のもと、5台のオーブンを使用し3時間かけ「やっと」完成した。文化部所属の生徒たちは最後まで、集中力を切らすことなく一生懸命に作業を行った。完成したピザを野球部・バレー部にも配り、「おいしい!」の声に達成感を味わったこ

とだろう。しかし、40枚のピザに必要なさまざまな材料の分量計算ミス、時間配分の計画立ての甘さが目立った。今後はより慎重に、丁寧な下準備が必要である。

今回の部活動交流は二年目ということもあり、生徒は昨年以上に積極的に交流に参加してくれた。学生との会話も弾み、恥ずかしがる素振りも見せず共同作業を行っていた。昨年の課題であった「生徒と学生の距離」が縮まったといえる。

今後の部活動交流における展望として、今回のように活動内容を学生側だけで計画立てるのではなく、厚田中学校の生徒との連携を図りともにプランの作成を行いたい。計画の段階から関わることで、生徒はより達成感を得ることができる。また、調理だけに留まらず、厚田の自然を生かした交流も視野に入れ、厚田の街探索や伝統文化発見の旅などを計画し、活動を発展させていきたい。

さらに、夜には厚田中学校の先生方と藤女子大学の交流も行われた。昨年同様、多くの先生に集っていただき、日ごろから学校で活躍する生徒の様子や教員の生徒に対する思いなどたくさんお話いただいた。今回の交流に限らず、先生には多くの場面で理解と支援をいただいている。改めて、この場を借りて感謝を述べたい。(西川絵梨：4(5))

(6) 地域展開

昨年度から、厚田 SAT を通じて石狩市と携わってきた岩崎と西川は、今年度から石狩市厚田区について知ることを重点に、ゼミ活動を行った。そもそも、藤女子大学花川キャンパスに通学しているにもかかわらず、私たち学生は石狩市についての知識は乏しく、厚田 SAT の活動を通じて、初めて知ることも多かった。そこで、フィールドワークなどを通じて石狩市について理解を深め、厚田 SAT だけではない、違う側面からの地域貢献に繋げていくことを目的としたのである。



写真4 事前打ち合わせ：香音

まず、5月のゴールデンウィーク中に古潭・厚田・浜益でフィールドワークを実施した。普段、厚田 SAT で訪問している中学校の生徒たちがどういった環境の中で生活をしているのかを実感するため、厚田の町並みを徒歩で回り、地元の飲食店に入るなどして、2日間を過ごした。その後もゼミの時間を利用して、厚田 SAT とは別に、およそ月に1度は石狩市の飲食店や施設を訪問し、石狩市を肌で感じ、地元の方々との交流を行った。

その際、我々が着目したのは“地産地消”である。厚田の鰯を活用した燻製や望来の望来豚を活用した飲食店など、石狩市では様々な場面で“地産地消”を目の当たりにした。そして、そういった活動を通じて出会ったのが聚富にある“香音”という一軒のカフェである。傾斜を上ったところにひっそりと佇むそのカフェでは、オーナーである小笠原さんが自ら栽培した作物を利用したピザやパスタを提供している。建物は木造で、屋内には小笠原さんお手製のパッチワークが数多く飾られ、窓からは田んぼや山々の自然が見下ろせるようになっており、温かく、とても素敵な空間が広がっていた。

石狩市について調査をした結果、私たちは石狩市の魅力は「食」であると結論づけた。自然豊かな環境の中で、“地産地消”に重点を置けるほど食材に富んでおり、他では手に入らないほど味も良い。そういった食材を活用し、石狩市の方々は工夫して食品開発に励み、スローフードを心がけた経営を行っている。そういった石狩市の魅力を普段、厚田 SAT で接している生徒たちに改めて実感してもらいたいという思いから、石狩市の食材を利用した料理教室の企画立案に至った。2012年10月20日、小笠原さんの協力のもと、香音での本格的な石釜を活用した“ピザ教室”の開催に至った。

今回の香音でのピザ教室では地産地消にこだわり、食材のすべてを石狩産の食材を使用することを特色とした。そこで、本大学花川校舎から車で約5分の場所にある「とれのさと地物市場」へと出向き、小麦やピザのトッピングに合う旬の物を調達した。さらに、小笠原さんが庭で栽培したピーマン・玉ねぎ・なすび、そしてトマトを用いて作成したトマトソース、バジルソース等も提供していただき使用した。岩崎・西川は、前日のうちにこれらの食材を下準備し、当日に備えた。

参加者は、我々が普段から活動する厚田 SAT で交流のある厚田中学校の生徒と、カフェ香音の近くにある聚富中学校の生徒を募った。しかし、厚田中学校の生徒は部活動の練習試合等と重なり参加が難しかったため、主に聚富中の生徒11人が集った。さらに、聚富

中学校の教頭先生、音楽教諭、厚田中の教頭先生とその娘さんにも参加していただき、地元である石狩の食を堪能すると共に、交流を行った。

ピザ作りの具体的な流れは、参加者は二人一組になり、岩崎・西川が予め量っておいた粉類に水を加え、西川・小笠原さん指導のもとこねていく。それらをこね終えたら、袋に入れ、冷蔵庫で発酵させる。その間に、小笠原さんに用意していただいた発酵済みの生地を取り出し、一人一枚ずつ丁寧に伸ばしていき、各々好きな食材をトッピングしていく²⁾。トッピングを行う際には、岩崎・西川が作成した、食材に関する情報を掲載したボードをもとに石狩産の食材を紹介した。参加者は、好きな食材を載せ、オリジナルピザを作成した。そして、カフェの庭の脇にある本格釜で焼きあげたものにタイトルをつけ写真撮影を行った。釜は、雨天のなか、小笠原さんが火起こしをしてくださり一枚一枚丁寧に焼き上げていただいた。さらに小笠原さんの計らいで、手製のパンも用意していただき、参加者は改めて地元食材の美味しさに触れた。

さらにピザ教室終了後には、岩崎が撮影した写真(完成したピザや製作段階の様子、最後に記念撮影を行ったもの)を用いてフォトカードを作成し参加者全員に郵送したことで、今回の企画を締めくくった。

石狩市は、広大な土地と恵まれた自然環境から魅力的な食材が多くある。そんな石狩市の大学に通っているながら、我々がこのことに気づいたのは最近の事である。地元の方々にとっては、この環境が当たり前であるからこそ見落としてしまっている部分もあるだろう。今回のピザ教室は、そういった地元の新たな発見を地元の子どもたちにむけて発信することが出来たのではないだろうか。今回、生徒から「こんな食材が地元にあるなんて知らなかった」という声が上がリ、地元の良さを知ってもらいたいという我々の願いが届いたと感じた瞬間だった。我々は、家庭科教員を目指しているため、地産地消にこだわった「食」の側面から



写真5 香音でのピザ教室

アプローチの企画は、今後の石狩市との関わりにおいて大きな意味をもつ活動であった。

しかし課題点もいくつかある。例えば、地元間交流であるが、時期的な問題から厚田中学校の生徒が1名も参加できなかった。二校間の交流を図ることも当初の目的の一つであったが達成できなかった。そうなってしまったのも、我々と各中学校との連携が密でなかったことが原因の一つである。何度も足を運び、参加者の意見に耳を傾けるなどして、より確実な方法で抜かりのないやり取りが今後求められる。

今年度の活動を通じて、「食」を大切にする石狩市の魅力について改めて実感したと同時に、フィールドワークを通じて見てきた石狩市の自然や携わってきた人々に対して好感を得るようになった。季節ごとに旬の食材を活用した「地産地消」に溢れる石狩市はやはり魅力的である。今後もこういった食材、自然環境に富んだ石狩市であってほしいと強く願うと同時に、「教育」を本大学で学ぶ我々の立場から何らかの形で石狩市に貢献をしたい。

この自然に富んでいる石狩市の環境保全を目的として、「環境教育」を促進できるような活動を行い、石狩市の魅力や現状について地元の子ども達と共有して、情報発信を行っていきけるようなプログラムの企画立案に携わり、石狩市の人々が地元を好きになるような取り組みを行う予定である。(岩崎遙・西川絵梨：4(6))

5. 厚田SATに対する学生による全般的な感想

(1) 学習支援の視点から

私は今年度、厚田 SAT に二回参加した。一回目は夏の学習支援で、私は野球部の学習会を担当し、そこでは野球部の生徒はとても熱心に勉強していた。わからない問題は皆で協力して解く。この光景は、小規模校ならではの光景だと思った。都市部の学校では夏休みに学校に集まり、皆で協力して問題を解くことはないのではないのでしょうか。これは二回目の学習支援の時にも感じたが、一学年の生徒数が少ないこともあり、学年関係なくみんな仲が良いなと思った。話した事がない子はいないし、グループに別れているわけでもない。休み時間になれば、皆で遊んでいるのを見ていて驚いた。私の中学時代ではいくつかの仲の良いグループがあり、他のグループとはあまり関わらなかったので厚田中学校の休み時間の風景を見ていて男女ともに仲の良いことが不思議に思った。部活もみんな一生懸命に頑張っていて、久しぶりに部活というものに参加して一緒に活動する事ができて楽しかった。

二回目に参加した数学の支援では、少し前に習った

問題を忘れてしまい解けない子が多いように見えました。しかし、どの学年の子も一生懸命問題を解こうとしていて諦めている子がいないなと思った。少人数での授業だからという事もあるかもしれないが、一人ひとりの学ぼうとする意欲が高いと感じた。しかし、学んだことを忘れないようにしようという意識が低いのかなと個人的に思った。わからない問題に対して私たち SAT は、答えを教えるのではなく、生徒自身が問題の解き方を思い出せるようにヒントを出し、自力で答えられるように指導し、少ない指導でも生徒側が問題を解けるようになったと思う。復習を何回もする癖をつれば、もっと学力が上がるのではと思う。普段見学する機会がない中学校で学習支援ができてとても良い経験になった。また機会があれば参加したい。

(外川茜：5(1))

(2) 部活動を通して

厚田 SAT の活動は通常の学習支援ボランティアに加え、長期休暇を利用した部活動交流会や、学校行事に参加したり、数学支援後の給食を一緒に食べたりなど、生徒と関わる機会を多くいただけるので、授業中では見ることのできない生徒の一面を垣間見られるところがいいところだと思う。

私は、夏休みの交流でバレーボールの部活動に参加をした。今までは生徒として練習を行っていたが、そこでは初めて「教員」という立場から指導する経験をした。学習以外の交流を重ねることにより構築された生徒との信頼関係は、通常の学習支援にも生かされているのではないかと考える。また昨年度、SAT の一貫で家庭科の授業をさせて頂く機会もあった。授業を行うために試行錯誤した結果、教えることは自己満足ではなく、生徒に寄り添うことだと実感した。このような活動は教員を目指す学生にとってとても貴重な経験であった。(足立瞳：5(2))

(3) 教職課程の学生にとっての学び

私は今年度の8月17~18日の活動から本格的に厚田 SAT に参加した。夏に始まり、その後、何度かの数学の学習支援や行事への参加、そして12月には2コマの家庭科の授業を担当し、多くの貴重な経験を得られた。

幼少の頃から札幌市で育った私にとって、厚田中学校のような小規模校を知ることは新鮮であり、母校以外の中学校の様子を見ることで、それまでの自分の経験からの中学校に対するイメージから視野を広げることができた。生徒の人数や校舎の大きさなど学校の規模だけでなく、小規模校だからこその生徒同士のつな

がりや、生徒と教員のつながりの深さについて、都市部の学校とは違う温かさや深さを感じられた。

文化部でのピザ作りや家庭科授業など、自分の専門性を発揮できる機会もあった。中学生が勉強や部活動をひたむきに頑張る姿を間近で見たり、生徒と関わりを持つことで、教職課程を履修する学生にとっては「教える」ことより「教えられる」ことの方が多かった。

今後、厚田 SAT を発展させていくうえで深く考えなければならないのは「学習支援」についてである。家庭科の授業のみならず、より多く行ってきた数学の学習支援についても、授業に参加して終わりではなく、できるだけ学生と学校側で意見交換をし、支援の向上を目指す必要があると感じた。例えば、事前に数学科教諭から数学における生徒の状況を聞き、学生は授業に入る前にその単元を学習しどのような点に注意するかを確認して、支援に臨む。授業終了後は学生と教員で意見交換をするなど、今回の支援が次回の支援へとつながっていくよう努力していきたい。

学生が中学生との関わりの中で学んだことを活かし学習支援に繋げていくことで、もっとお互いにとってプラスとなる活動へとステップアップできるだろう。今年度の経験を、来年度の取り組みや新たに活動に加わる後輩につなげていきたい。(深澤麻依：5(3))

(4) 生徒との関わり

2012年度の厚田 SAT は活動内容のとおり、月一度の訪問を継続的に行うことができた。学習支援に加え、厚田中学校の多くの行事にも参加させていただいた。また、学生の多くが昨年度から続けてこの活動に参加してきたことで、学習支援や生徒との関わりが自然に行えるようになった。生徒との多くの関わりの中で、私達は確かに、信頼関係を形成することができたと実感した。厚田 SAT は教員を志望する学生にとって、「現場」を体験する良い機会であり、生徒にとっても外部の人間が学校に来ることは刺激にも繋がるだろう。

昨年と異なる点は、より学生が主体となって活動を行ったことで、生徒にとって「学生=外部者」ではなく「学生=身近な人間」になった点である。回数を重ねるごとに生徒の個性に気づき、厚田中学校の輪(生徒と教員、教員と保護者・地元民の方々の繋がり)に、一歩近づけたと感じている。課題点は、このような学生と生徒との繋がりを、今後どのように維持・発展させていくかである。中でも夏の交流は、学生が主体となって行ってきたが、今後は生徒と共同で交流内容や役割を練るのも面白いだろう。(西川絵梨：5(4))

(5) 厚田 SAT の継承

厚田 SAT 開始当初から携わっている身として、学校だけではなく、保護者・地域の方々へと、目に見えない形で着実に浸透しているのを体感し、非常に喜ばしく思っている。また、本プロジェクトが今後も継続して行われ、厚田中学校と本大学が相互に影響しあい、学び合えることが続くことを強く望んでいる。そのためにも、まずは後継者作りをしなくてはならない。現在携わっている主だった学生は、来年度から 4 年生になる。これからも厚田 SAT が継続していけるよう、来年度からは後輩へと引継ぎの作業に重点を置きたい。

そこで、来年度からは厚田 SAT の参加者を募ると同時に、基本的なシステム内容を見直す必要がある。現在行われている内容に加え、家庭科の授業をする際には、参加者での模擬授業や研修会を積極的に取り入れるなど行い、一歩前進した内容にし、本プロジェクトに積極的に携わってくれるような後輩を育てていきたい。(岩崎遥：5(5))

6. 大学教員による評価

2011 年度に厚田 SAT を開始する際、中学校の山村健史教頭(当時)と「学習支援を始めるならば、数年単位で継続的に行う」「負担『感』を持つような取り組みにはしない」と二つの約束をしたことを、今でも思い出す。この約束をもとに、今年度の厚田 SAT を振り返ると、次の三つを評価の視点として提示したい。

第一に、学生の自主性が推進された点である。これは、中学校側との連絡、交通手段の確保など、厚田 SAT を維持する上で、最も重要な事柄であることを学生は自発的に認識してくれた。特に、交通手段については、保険条項に関して石狩市教育委員会と確認作業をした上で、学生たちの自家用車、時にはレンタカーを借りて、厚田中学校へと向かった。これらを確保できない時には、一人で厚田にバスで向かった学生もいる。さらに、1 月の学習支援では、藤学園のバスを利用して、厚田中学校に向かった(もっとも、この日は快晴で、路面凍結も全くなかったのだが…)。また、学校行事(学校祭や文化部交流)の企画の際には、大学の教員は全く関与せず、学生が計画を練り、中学校側との交渉をしてきた。このような学生の自主的な活動があったため、大学教員の主な仕事は、可能な限り、学生たちの財政的な負担を軽減することであった。その点で QOL 研究所からの助成金は、学生たちの自主性を推進するためにも、非常に有効に利用させていただいた。

この自主性の促進は、昨年度から厚田 SAT に関与していた学生 3 名の存在なしには考えることはできな

い。つまり、第二の評価の観点である学生参加の「継続性」がプロジェクト推進の要であることを再び思い起こしてくれる。次世代の参加者を増やすために、3 年生も多くの取り組みをしてくれた。しかし、単発的に参加してくれる 2 年生はいるものの、継続的な参加には至らなかった。今後も厚田 SAT への継続性を維持するためにも、少数であっても、参加学生の学年バランスを意識し、安定性を維持すべきであろう。

第三に、二年目も終わり、厚田 SAT の効果性を検証する時期にある。確かに、中学校の生徒及び教員のインタビューを見ても SAT に対して肯定的な意見が多い。また、厚田中学校の今年度の全国学力・状況調査の結果も好調であると聞いている。以上のことから、厚田 SAT が一定の成果を得ていることは間違いない。しかし、より効果的な厚田 SAT を実施するためにも、活動内容を客観的に見直す必要もある。近年、石狩市だけではなく、札幌市・北海道教育委員会でも大学生などによる学習支援の募集が活発化している。もちろん、事前オリエンテーションを設定し、支援の質を維持に配慮している箇所も認められる。その点、厚田中学校を含む石狩市 SAT は、参加学生の「自主性」に頼っているのが現状である。学習支援の質を維持するためにも、何らかの配慮が必要であろう。

(伊井義人：6)

おわりに

ここまで 2012 年度の厚田 SAT を振り返ってきた。私たちは、昨年度の反省をもとに、「継続性」「新規性」の達成という二つの目標に挑戦してきた。これらの目標は、一定程度、達成してきたと私たちは自負している。その一方で、来年度、厚田 SAT は三年目を迎えることから、学習支援に対するより充実した自己・外部評価とフィードバックを行う予定である。

厚田 SAT の二年目を無事、終えることが出来たのは、通常の学業時間を調整し、月一度以上、定期的に中学校を訪問した学生たちの継続への努力に加え、厚田中学校の教職員・保護、地域の方々の協力の賜物である。三年目の厚田 SAT は、大学と厚田中学校との信頼関係を一層深めるため、より多くの方々に協力をいただきながら、継続して行きたい。

(伊井義人：おわりに)

注

- 1) 伊井義人、山村健史他 6 名「藤女子大学と厚田中学校との学習支援連携～実施初年度の現状・課題そして将来的展望～」『藤女子大学・人間生活学研

- 究』(第19号)、2012年、63～78頁を参照。
- 2) 生徒がこねた生地は持ち帰ってもらい、自宅で再びピザを作ってもらえるようお土産とした。自宅

での作り方として、フライパンやオープン・トースターで焼く方法なども紹介した。

The current issues and future prospects of learning support partnership between Fuji Women's University and Atsuta Junior High School

Yoshihito Ii

(Associate Professor, Fuji Women's University)

Shinji Nakamura

(Deputy Principal, Atsuta Junior High School, Ishikari)

Haruka Iwasaki

(Undergraduate Students, Fuji Women's University)

Eri Nishikawa

(Undergraduate Students, Fuji Women's University)

Hitomi Adachi

(Undergraduate Students, Fuji Women's University)

Mai Fukazawa

(Undergraduate Students, Fuji Women's University)

Akane Togawa

(Undergraduate Students, Fuji Women's University)

This paper aims to report the current conditions and future prospects of learning support partnerships (School Assistant Teacher: SAT) between Atsuta Junior High School and Fuji Women's University. This program has been implemented by Ishikari City board of education with the university students. In this program almost ten students who want to become a teacher has involved in learning support for junior high school students especially in the subject of mathematics.

This year is the second year of implementation of this program. Comparing to last year, our project promote university student's the involvement in school events, relation with community and guardian of students, and university student's autonomy in terms of coordination of this program. On the other hand we should challenge some problems such as transportation to Atsuta and obtaining the number of students to maintain the learning support in junior high school.